

菅原道真の詩に投影された『白氏文集』（その九）

——「送春」の詩をめぐって——

焼山廣志

若使（注2）韶光知我意 若し韶光じやうこうをして我が意を知らしめば

今宵こよひ旅宿在詩家 今宵の旅宿は詩の家に在らん

（『菅家文章』巻第五）

※（注1）…作品番号は岩波古典文学大系本の通し番号に従う。以下同じ

※（注2）…岩波古典文学大系本では「便」となっているが内閣文庫本・蓬左文庫本により「使」に改めた。

菅原道真の漢詩集『菅家文章』の巻五に「送春」として次の一首が所載されている。この詩には後述する詩序が付せられており、そこには当時の平安朝漢詩人が中国の漢詩文をどのように享受して来たのかの一端を知り得る興味ある内容が込められている。又、投影関係の指摘がなされて久しくなる白居易の詩についても道真のこの「送春」について内容を吟味した場合、単なる詩句の投影にのみならず、詩情の類似といった深い投影関係まで論じる必要があるように思う。以下この作品に即しながら一試論を展開してみたい。

一

391（注1） 送春

送春不用動舟車 春を送るに舟車を動かすことを用ひず

唯別殘鶯與落花 唯ただ殘鶯ざんおうと落花らつがとに別る

この一首は既に川口久雄氏の指摘があるが（注3）一・二句の「送春不用動舟車／唯別殘鶯與落花」と三・四句の「若使韶光知我意／今宵旅宿在詩家」が二分割されて『和漢朗詠集』巻上・春・三月風に載せられている。名句として平安朝の文人達に愛唱されたことが窺い知れる。さてこの詩には次の詩序が付せられている。

七年暮春二十六日、予侍東宮、有令曰、聞大唐一日應百首之詩。今試汝以一時應十首之作。即賜十事題目、限七言絕句。

予採筆成之、二刻成畢。雖云凡鄙、不能燒却。故存之。

(七年暮春二十六日、予東宮に侍りしとき令有りて曰く、聞くならく大唐に一日百首に成ふるの詩有り。今試みに汝一時を以て十首の作に成よとのたまへり。即ち十事の題目を賜ひて七言絶句を限りたまふ。予筆を採りて成すこと、二刻にして成し畢はんぬ。雖、凡鄙なりと云ふとも、焼却すること能はじ。故に存すといふ。)

※本文・訓み、いずれも岩波古典文学大系本に従う。

この詩序に川口久雄氏は詳細な考察をなされている。(注4)その中で指摘されている『太平記』の一文を次に挙げてみる。

同じき年の三月二十六日に延善の帝未だ春宮にて御坐ありけるが、菅少将を召されて「漢朝の李嶠は一夜に百首の詩を作りけると見えたり。汝盍んぞ其の才に如かざる。一時に十首の詩を作って天覧に備ふべし。」と。仰せ下されければ、則ち十の題を賜はりて、半時ばかりに十首の詩を自作らせたまひける。

送春不用動舟車 唯別殘鶯與落花

若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家

と云ふ暮春の詩も其の十首の絶句の内なるべし。

(『太平記』巻第十二、大内裏造管事付聖廟御事)(傍線筆者)

※本文・訓みは岩波古典文学大系本に従う。

道真の詩序の中で「大唐に一日百首に成ふるの詩有り」とあ

る所がこの『太平記』の一文によれば「漢朝の李嶠は一夜に百首の詩を作りけると見えたり」と具体的に記されている点は注目値する。川口久雄氏は前述の注で「一日百首成令詩が唐に行われたことは李嶠の百廿詠などで類推できるがその作品は未詳。(中略)李嶠の百廿詠は五律であるが、毎詩、題を換えたところの詠物詩である点で道真の十首詩・二十首詩と体式において似ている。(中略)李嶠の百廿詠の題とかさなりあうものが多いから必ずや道真の作にはこれらの投影があろう。」(注5)と論じられている。古くは『太平記』に、そして川口久雄氏の論の中でもこの道真の十首の詠物詩に関わりの指摘されている李嶠の百廿詠は、藤原佐世撰の『日本国見在書目録』にも「李嶠百廿詠 一」とあり(注6)道真の時代に既に目にする事ができた事は間違いない。

しかしこの道真の十首にこの李嶠の百廿詠の投影があるとい体的に実証する作業は、更に慎重な考察を要すると考える。今回の拙稿ではそこまで立ち入る事は避け、寧ろ先学より指摘されて来て久しい白居易の詩の投影という観点で論を進めてみる。

筆者が道真の詩序の中で見逃してはならないと考える箇所は「予筆を採りて成すこと二刻にして成し畢はんぬ。凡鄙なりと云ふとも焼却すること能はじ。故に存すといふ」の一文である。つまり即詠の詩であり、字句通り読めば「それ故、つまらない詩になってしまったが焼ぎ捨てることもできず、このように残って人目にさらすはめになったのである」の意となるが、これはあくまでも道真のポーズであってそこには自分の詩才に対する並々ならぬ自負なるものが見え隠れしている気がしてならない。

この「送春」に限ってみても、内容吟味の前に韻そのものを調べてみる。

送春不用動舟車	●●●●●○
唯別殘鶯與落花	○●●●●○
若使韶光知我意	●●●●●●
今宵旅宿在詩家	○●●●●○

(※) ○印：平韻 ●印：仄韻 ◎印：脚韻)

となり脚韻は車・花・家で下平声九麻を使っている。一句目の二字目が孤平、二句目の二字目が孤仄になっている点を除けば、「二四不同二六対」は守られているし「二三連」もない。又一、二句目が「反法」二・三句目が「粘法」三・四句目が「反法」となっており「失粘」もなく見事な構成に仕上がっていることに驚かされる。こうした一例をとっても詩序にあるような道真の字句内容とは裏腹に、速詠を強いられた中で道真がいかなる気概で詩作に没頭したかは想像に難くない。そこで詩内容に目を移してみる。

三

この道真の詩「送春」への白詩からの投影の指摘は既に金子彦二郎氏より「除蘇州刺史、別洛城東花」との類似関係の記述がある。(注7)

この白詩を以下取り挙げる。

241(注8) 除蘇州刺史、別洛城東花
 亂雪千花落 亂雪千花落ち
 新絲兩鬢生 新絲兩鬢に生ず
 老除吳郡守 老いて吳郡の守に除せられ
 春別洛陽城 春洛陽城に別る
 江上今重去 江上今重ねて去り
 城東更一行 城東更に一たび行く
 別花何用伴(注9) 花に別るるに何を用ひてか伴ふ
 勸酒有殘鶯 酒を勸むるに殘鶯有り

(『白氏文集』卷第五十四)

※注8：作品番号は花房英樹著『白氏文集の批判的研究』

(2総合作品表)の分類番号による。

本文は那波本『白氏文集』に従い、訓みは『統国訳漢文大成 白楽天詩集』に従った。

以下の白詩についても同じ。

※注9：傍線は筆者が施す。道真の詩との類似箇所を示す。

この白詩の制作年時は先の花房英樹氏の著によると宝曆元年(西暦八二五年)白居易五十四歳の三月四日蘇州刺史となり二十九年に洛陽を出発して五月五日に任地についたとある。この詩はこの洛陽の春に別れを告げた内容であることがわかる。又、詩意として鶴田久作氏の解釈を引用すると「花が散って雪が乱れ飛ぶが如く我が両鬢の毛は益々白くなった。我は老いて蘇州

刺史に任せられ、春洛陽を立ててまたもや江上に行くので一たび城東の花に別れを告げようと思う。花に別れを告げるのに何を携えて行くかとならば残鶯がいて頻に酒を勤めるから酒は必ず携えて行かねばならぬ（注10）とある。

さてこの白詩の詩句を踏まえて道真の詩句に目を移すと、道真の詩「送春」の第一、二句目「春を迎るに舟車を動かすことを用ひず／唯残鶯と落花とに別る」の語句は、この白詩の第七、八句目「花に別るるに何を用ひてか伴ふ／酒を勤むるに残鶯有り」を撰取利用していることが明らかになる。ここで類似点を列記すると次のようになる。

『白氏文集』	『菅家文章』
●●●● 別花何用伴 ●●●● 勸酒有残鶯 (241七・八句)	△△△△ 送春不用動舟車 ●●●● 唯別殘鶯與落花 (391一・二句)

※…は同語句 △は類似語句を示す。

この類似点は、しかも白詩の詩内容とはほとんど関わりがなく、寧ろ抄句としての利用姿勢が濃厚であるように思える。この道真の詩が即詠のものだという詠作事情を鑑みれば、こうした撰取の仕方は充分肯首できる所である。

一方、次の道真の詩句第三、四句「若し韶光をして我が意を知らしめば／今宵の旅宿は詩の家に在らん」の句内容には直接

的には語句の類似ということで白詩からの投影を指摘できるものは検索し得ないのであるがこれも、又、即詠を強いられた作品であるという事情を考えた時、白詩の類書の利用として同詩題のものからの投影が考えられるのではないかと推測する。

白詩の中に「送春」として同題の作品がいくつか存在する。この中で詩内容に類似の見られる次の詩を挙げる事ができる。

0487 送春

三月三十日

春歸日復暮

惆悵問春風

明朝應不住

送春曲江上

眷眷東西顧

但見撲水花

紛紛不知數

人生似行客

兩足無停步

日日進前程

前程幾多路

兵力與水火

盡可違之去

唯有老到來

人間無避處

感時良爲已

三月三十日

春歸日復た暮る

惆悵して春風に問ふ

明朝應に住まざるべしと

春を送る曲江の上

眷眷として東西に顧る

但だ見る水を撲つ花

紛紛として數を知らず

人生は行客に似たり

兩足停歩無し

日日前程を進む

前程幾多の路ぞ

兵力と水火と

盡く之を違けて去るべし

唯だ老の到來する有り

人間避くる處無し

時に感じて良に己めりと爲し

獨倚池南樹 獨り池南の樹に倚る

今日送春心 今日春を送る心

心如別親故 心は親故に別れるがごとし

(『白氏文集』卷第十)

この詩は前記の花房英樹氏の考証によれば元和十年(西暦八一五年)白居易四十四歳の時、長安での作とある。又、詩意として鶴田久作氏の解釈を引用すると「三月三十日、春去る。日も暮れた。悲しみを抱いて春風に聞いて見た。あすはもうお前も此處にはいないだろうなど。曲行の上に行って春を送り、懐しさのあまりあたりを見廻すとただ花がはらはらと池の水に落ちるのを見た。もう春はどこにもない。さて人生は旅の人と同じで暫くも足の働(はたら)きを停(とど)めずにとんとんと前途に向って限りなく進む。兵戦や水火の難は避ける法もあるが、ただ老の到来は如何とも避けようがない。もう自分は時の摘(と)りとなって老が迫っているのだ。独り池の辺の木に倚って感慨に耽(ひた)った。今日、春を送るのは丁度親戚故旧に別れるような気がする」(注11)とある。

この白詩は道真の詩と語句の類似という点では確かに前述の白詩「除蘇州刺史、別洛城東花」で指摘したような箇所は見当たらないのである。ところが詩情の類似という点で考察すると注視すべき事実が明らかになってくるのである。以下その点について述べてみる。

この道真の三、四句に白詩の投影を認めることができそうな箇所を図式化すると次のようになる。

『白氏文集』	『菅家文章』
△△△△△△ 今日送春心 △△△△△△ 心如別親故 (487・十九・二〇句)	若使韶光知我意△△ (391 第三句)
△△△△△△ 惆悵問春風 △△△△△△ 明朝應不住 (487・三・四句)	△△△△△△ 今宵旅宿在詩家 (391 第四句)

※△印：白詩と道真の詩の類似箇所を示す。

まず道真の詩、第三句「若使韶光知我意」の意は「もし春光に春を惜しむ私の心情を知らせることができたら」となるが、この発想の前提になるものとして白詩「送春」の第十九・二十句の「今日、私の春を送る心情というものは、親戚故旧と別れるときのものと同じである」の句意が指摘できそうである。恐らく、道真の詩、第三句の「我意」は白詩で言う「春と別れる心情は親故と別れる時のものと同じようなもの」であろう。この詩内容が道真の脳裏にあったものと理解されるのである。

また道真の第四句「今宵旅宿在詩家」の意は前の三句目を受けて「春はきつと最後の一日を詩人(道真自信)の家に宿ることであろう」となり、この発想の根底にも白詩「送春」の第三、四句の「嘆き悲しむ心情で春風に問うた。明日はここにはもう

居ないのだから」との意が踏まえられていると考えられるのである。つまり道真の詩、第四句の「今宵旅宿」は「春風が」明朝はここにいないだろう」とする白詩の詩意が理解されての句作りであると考えられる。

確かに先に述べたように、この白詩と道真の詩では直接的な語句、内容の指摘は明確には出来ない。

ところがこの白詩の詩題が「送春」であり、道真の詩と同題である。詩内容を検討してもこの両詩はよく似ている。道真が表現や発想をこの同詩題の白詩にそれに求めているのではないかという推測は前述の道真の詩序にある一文と鑑みれば、強ちの外れとは言えないのではないかと思う。しかも「同詩題の白詩に詩作のモチーフを得る」という、この事を裏付ける詠作姿勢の窺える作品の別の一例として、この「送春」の詩と同じくして詠作された十首の詠物詩の一つ「夜雨」にも指摘できる事は示唆的である。

393 夜雨

不看細脚只聞聲 細き脚を看すただ聲を聞くならくのみ
 暗助農夫赴畝情 暗に農夫が畝に赴く情を助く
 通夜何因還闕意 通夜何に因りてか還りて意を闕えしむる
 尚書定妨早衛行 尚書定めて妨げられむ早衛行

(『菅家文章』巻第五)

※：作品番号・本文・訓みは、岩波古典文学大系本に従う。

この道真の詩に対し、同詩題の白詩を検索する中で次の詩に注目してみる。

0443 夜雨

早蛩啼復歇 早蛩啼いて復た歇み
 残燈滅又明 残燈滅えて又明なり
 隔窓知夜雨 窓を隔てて夜雨を知る
 芭蕉先有聲 芭蕉先づ聲有り

(『白氏文集』巻第九)

語句的には直接的な類似は指摘できないが、詩内容の類似という点では次のような所が考えられるように思う。

『白氏文集』	『菅家文章』
隔窓知夜雨 芭蕉先有聲 (443 第三・四句)	不看細脚只聞聲 (393 一句)

※：△印は両詩の類似箇所を示す。

この白詩の句意は「窓を隔てて聞くと雨が降って来たらしい。芭蕉に降りかかる音がそれを私に知らせている」となり、道真の詩の第一句の意は「夜の雨は雨脚は見えないで、降りしきる

両音だけを耳にしている」となる所である。

この両詩には、雨を視覚でとらえるのではなく、聴覚でとらえている点で同一の発想が見られるのである。道真は恐らくこの発想を同詩題のこの白詩より摂ったのであろうと考えられるのである。

四

以上の道真の即詠の詠物詩十首の一つ、「送春」の解釈をめぐって道真自身の付した詩序を手掛かりに考察をして来たわけだが、詩序の中にある中国の先例となる詩作品そのものが何であるのかを検討することなく白詩からの投影という一視点だけでこの道真の作品を論じるのは片手落ちの感をまぬがれ得ないが、筆者は「二刻にして十首を詠作し終えた」という一文に注目し、そうした即詠の詩作であるからこそ、つとに投影関係が指摘されている白居易の詩の影響を一段と濃厚に受けているのではないかと考えた。しかもこの道真の詩群は巻五に収められており川口久雄氏の考証(注12)によれば、五十一歳の時、いわば道真が栄達をきわめている時期の作品である。詩作にもその社会的道真自身の状況が反映されているはずである。即詠の平凡な詩と述べつつそこに並み並みならぬ道真の自信のほどを窺い知れるのである。そしてそれは、白詩からの投影という視点に限ってみただけでもそれが単なる白詩の抄句の撰取にとどまらず、それと並行して同詩題の白詩の作品の中からも非常に巧みにそのモチーフを撰り入れているその一端をこの「送春」

の詩の分析考察の中で多少明らかに出来たように思う。

換言すれば、白詩の撰取が直接的なものから、より間接的にあるいは複雑化したものに変化して来ており、そこに白詩の表現内容がいかに巧みに道真の詠作のモチーフとして、吸収、深化されていったのかを窺い知るのにこの「送春」の一首は好例を呈していると思われるのである。

(注3) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注七二頁

(注4・5) 岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注七〇頁より七二頁

(注6) 『日本国見在書目録―集証と研究―矢島玄亮著』二二頁

(注7) 『平安朝時代文学と白氏文集―道真の文学研究編第2冊―』三七二頁

(注10) 『続国訳漢文大成 白桑天詩集三』六〇九頁より六一〇頁

(注11) 『続国訳漢文大成 白桑天詩集二』五〇頁より五一頁

(注12) 岩波古典文学大系『菅家文章 菅家後集』解説八八頁及び補注七二〇頁

この稿を草するにあたり、『菅家文章』の本文校合で、熊本大学金原理教授より内閣文庫、蓬左文庫『菅家文章』の写本をお貸しいただいた事に深謝申し上げます。

一九九二年五月二十八日 執筆了

(大学院第七回修了・有明高専)